

第三章・民族・民俗研究  
三浦半島民俗扣帳(一)

三浦半島民俗扣帳(+)、掛鏡へ出でるは當類也とはゆかば。いはれ「懸鏡ある」ものもしくは「鏡ある」ものと考へて可い。

も子供はア歌の歌の歌でもう寝合せでいいのをやつた。やむを得ぬ、多はア歌尾も叶ひ難<sup>ハシ</sup>赤<sup>シタ</sup>の橋<sup>シタ</sup>太<sup>シタ</sup>の橋<sup>シタ</sup>太<sup>シタ</sup>の郎<sup>シタ</sup>太<sup>シタ</sup>の郎<sup>シタ</sup>

三浦郡初声村（今の三浦市初声町）和田生れの山田国蔵さんは明治十五年十二月生れだから今年七十六才になる。二十二、三才まで和田にいたが、横須賀海軍工廠の工員になつて横須賀市公郷町宗源寺に住んでいた人。この老人から初声村を中心とした三浦半島各地の古い民俗資料を色々聞いて書きとめてある。その中から順序不同に書き出してみよう。

○大人一人前の仕事量は「ふすき（註）は二畝、鋤は六畝」といわれたものだが、ねばたけ（堅い畑）は四畝（鋤の場合）で一人前だった。明治三十年頃日当十五錢だった。（註、T字形の柄をつけた踏みすき。すこっぷ状の農具。荒おこしに使つた。今は次第に見られなくなつてゐる。）

○麦つきうた――「なぜかこの麦や、ア、ドッコイシヨ、つけない麦だ、ア、ドッコイシヨ、ひねかおくらの、ア、ドッコイシヨ、下ずみか、

娘十七八、だきじるねごる、お手をひきじる、だまじるは半面がまく腰打。おぬかの腰打を六歳。おはうよ朝暮の時附まおゆめのあゆもしたかせんすりこけすおりやさせやせぬ、おりやしたぐなりや手でこきる「誠穂」の名が勝ります。御前達の音楽は秦くさくや。『そら風とりがな』こうと夜があけようが、そのわけきかなきやかえさせぬ。八月二十三日。番号「しの誠穂」もよみた。この日御前達の音楽若なくなちやぼうとり長夜がある、あけりやお寺の鐘がなる。

こぼれまつばをあれみやしやんせ、かれておちても一人ずれもあ食つむかぬ「萬々半らいひすき家」わざに言葉だらる。金額入らざり  
さいたさくらにやあらしがどくよ、私しやあなたにあうがどくち。のじ實はあらか圓鏡つねじながれぬかじん鏡子玉を育じたりのうだつ  
おまえひよりとこわたしはおかめ、出来たその子はししひばな

○初声の子守うた——ねんねこせ／＼、坊やの守はどこにきた、お山をこして里にきた、お里のおみやに何もろた、でんでたいこにきようのふえがざぐるま、ひいてたたいてお目にかけ、坊やはいい子だ、ねんねせ／＼。○長井大木根あたりで子守娘が通る人をひやかしたうた——「あの人、んどこの人、おすましなさる、男よいのがごじまんか」ひとりがうたうと、他の者が「アーミイ／＼」とはやした。また日本おとぎ、ヤーマリはんじゅ、おひのむちわらねねうたも、ヤーマリはんじゅ一曲をもやす

○やごめつきうた——こちらの種子まきやよい日にまけた、アードッコイショ、ないのひだちもさぞよから、アードッコイショ——種子もみを俵のまま池に十五日位つけておき、四月二十日過ぎのよい天気のときあげて水洗し、四斗だるに入れ、さんだわらで蓋をしてかしげ、日向にむけておく。半月位たつと芽が出る。これを蒔く。残りをふかし、いつてから二斗臼に入れてチョロケン（杵の一種）で若衆が半日位つく。焼米つきうたはこの時にうたう。この日を「たねまき正月」という。つき終るとこちそうになる。帰りは夜になるが昼間話をつけておいた女とつれだつてゆき、ボサにころがした。女もそれを承知でついていった。

○津久井のつび十夜——宝蔵院の十夜のこと。とてもにぎわった。この夜はそれと目ぼしをつけた女をさそつて浜やボサにつれこんでころがした。その夜は女もそれを承知で來たもんだ。弁当などが少量すぎて食いたりないとき「津久井のつび十夜だ」という言葉がある。何処に入ったかわからぬの意だそうだ。

○つび地蔵——南下浦町金田の円福寺の本尊地蔵は十年に一度開帳する。八月二十三日。俗に「つび地蔵」とよんだ。この日は遠近から参詣者がすこぶる多く、夜までにぎわつたが、この夜行われた風習によつて「つび地蔵」の名を得たもので、隣接村から若衆が多くでかけた。(その風習——相手かまわづこの夜は野合が行われたものだ。明治二五年頃はまだ盛だったが次第にすたれた。それでも昭和の初頃までは少しあつたそうだ。)

○津久井の浜せがき——宝蔵院の浜せがきとも呼ぶ。寺の前浜で八月二十四日夜せがきが行われ船から燈ろうを流すのを浜に多勢集まつて見物した。この夜も相手かまわづの野合が行われたので有名だつたそうだ。

○西の風とひようとり（日やとい）は日一ぱい。

○こじょはん——おやつのこと——にはあわのこわめし、あわの水もちが出された。

○毘沙門の人達はけちで有名だつた。そこ馬鹿ばやしも有名だが、「むこ」は三年間たいこかつぎをさせられたものだ。

○松輪の「あげあなかんじょう」……南下浦町松輪。「あげあな」とは畠の間に竹根が侵入せぬよう深く掘つた穴のこと。松輪は漁場で男は漁に出てしまふから畠は女がやつていた。長井・初声方面の二、三男がひょうとり（日傭）にやとわれて畠を耕作にいつていたが、やとい主の女にさそわれて畠の隅のあげあなで野合することが多かつた。その場合、それと差引されて錢をもらえなかつたので、それを「松輪のあげあなかんじょう」と呼んだそうだ。明治中頃には「四日一両」といつて四日働いて一円の賃錢だつた。それで「四日一両でやつてくんna」と云つてやとつたという。長井・初声あたりの二、三男で嫁ももらえず、むこにも行けぬ者は、松輪へ出かけて常時やとわれていた。これを「松輪おんじ」とい、「あげあなかんじょう」を承知で行つていた。

○三崎の女は各地で茶屋女になつてゐるのが多かつた。

○三崎は漁師が漁のないとき、金まで質に入れ、数軒で一つの釜しかないこともあった。ぼろ布を風呂敷包にして、中を見ないで幾らか貸してくれといって借りることさえあつた。

○初声から三崎へ肥料をとりに行つたが、その時はそだ二把を桶の上にのせて行き、肥料一荷とそだ二把と交換に汲んで来た。三崎は燃料が少いから。

○ねやど——若衆が夜遊びしておそくなると泊る共同の宿があつた。「ねやど」と呼び、大正頃まであつた。北下浦・津久井・高円坊にもあつた。

○巨人伝説——長沢本行寺わきの池に巨人伝説がある。昔巨人が房州へ渡ろうとして和田から「またぎで長沢に片足をふんだ。その足あとが本行寺わきの池である。巨人は房州へ渡って行つたが抱えていた石を落していった。その石が長沢下の海にある三磯である。

○やいめつきうた——「やいめどいやくらんでつくのはいいだし、ついてくわせるよなかほしや」「ほどのほんのくどにぼつちやりげがなけりや、あほどよかろさせよから」（もと、『西遊記』、西行著、〔西行〕平成元年、文藝出版社）。

○みぢら（みのともない） ○一もろ一悪いも、一も歩きぬくも、一歩一歩一悪也、一歩一歩一善也。世間言をぬる方に善きも一歩。  
○ひるま（ひるめし） 防止の意。古事記の「わがわが」。

○ぶんのくど（額）  
平井・畠井、三輪市田舎の腰巻き子である。腰巻が子供をもつていた頃から、腰巻の農家の女が耕作時着る作業衣を「うでねぎ」と呼ぶ。綿綴の布を用い、腕は極めて細く作る。腕の部分は「めくらじま」（黒色）の布を用

（農家の女が耕作田に立てる仕事のない日は、田んぼの腰をはして半巾帯をしめ、「田ももひき」をはき、前かけを短くしてしめる。田ももひきもめくらじまで足にびったりする細いものである。）内川新田あたりではぐみ、ねこやなぎ、ねずみやなぎなどを庭に挿木するものでないといわれている。これらの木はうめき声を聞いたがる木だから病人がたえないという。